

石川県白山自然保護センター普及誌

はくさん

第29巻 第2号



奥長倉避難小屋

加賀禅定道は、尾口村一里野から室堂まで18.2km、距離の長い登山道です。平安時代からある歴史の古い道で、しかり場、美女坂、四塚など、伝説の知られる場所がいくつもあります。その中間あたりの奥長倉山山頂の北側、標高1,740mのところに避難小屋があります。

周囲はダケカンバの林となっていて、この付近から上が亜高山帯や高山帯になります。夏なら天池や四塚山のお花畑、水量の多い百四丈滝、秋なら清浄ヶ原の紅葉がみごとです。避難小屋から下では、登山道はブナ林の中を通っています。

小屋の2階には積雪期用の出入り口があり、そこから笈ヶ岳や大笠山など、北部白山の山並みを眺めることができます。また避難小屋のすぐ横の登山道から、穂高岳より北に連なるアルプス連峰を遠望できます。

(上馬 康生)

白山のゴミムシ類

平松 新一



ハクサンクロナガオサムシ

ゴミムシ類は、コウチュウ目オサムシ科を中心とする昆虫のグループです。この仲間には樹上性の種もありますが、その多くは地表で生活しています。地表で生活するゴミムシ類は主に夜間に活動するため、普段はあまり目にすることはありません。そのうえ、体は茶色から黒色、大きさも2cm以下の種が多く、日中に活動し、大型で目立つチョウやトンボに比べて、見過ごされがちでなじみの薄いグループです。しかし、ゴミムシ類の種類数は決して少なくはなく、石川県でもこれまでに300種以上が確認され、その分布域も草地や森林はもとより、海浜、河川敷、高山、さらに洞窟や地下浅層など様々な環境に広がっています。

地表生活に適応したゴミムシ類には、後翅が退化した種が多く存在します。飛ぶことができなくなったこれらの種は、おのずから移動範囲が限られ、そのため、これらのゴミムシ類は、地理的条件などで隔離されると、孤立した地域で遺存種になったり、種・亜種レベルで分化したりすることがあります。したがって、ある地域でゴミムシ類を調べることは、その種がどんな環境に分布しているかを知るだけでなく、そこに生息するゴミムシ類がいつどこからやってきたのかや、その後どのように種が分化していったのかを知るための手がかりにもなるのです。

ゴミムシ類の採集には、ピットフォールトラップという落とし穴式のワナがよく用いられます。これは、紙コップなどを地表すれすれに埋め、そこに落ちたゴミムシ類を採集するといういたって簡単な方法です(写真)。このワナはゴミムシ類だけでなく、シデムシ、ハネカクシ、ハサミムシ、コオロギ、ダンゴムシなど地表を生活場所とするさまざまな生き物が採集できます。また、このワナにビール、すし酢、釣り餌のサナギ粉などを少量入れておくと、より効果的にこれらの生物を誘引することができます。

白山のゴミムシ類

私が白山でゴミムシ類を調べ始めたのは、1997年からです。当時私は、石川県ふれあい昆虫館開設準備の仕事をしており、その展示用資料の調査のために、白山のゴミムシ類を調べ始めたのが彼らとつきあうきっかけでした。調査を始めた頃の私は、ゴミムシ類についての知識がほとんどありませんでした。それでも、多くの方に教えをいただくことで、徐々にゴミムシの魅力にとりつかれてしまい、昆虫館を離れた現在も彼らとつきあい続けています。それでは、私の調査結果と過去の資料をもとに、白山のゴミムシ類についてお話ししましょう。

白山で見つかっているゴミムシ類は何種類いるのでしょうか。この質問は多くの方に聞かれそうですが、その答えは案外難しいのです。というのは、白山の範囲をどこまでとするかによって、見つかっている種類数が大きく変わって



ピットフォールトラップ

しまうからです。さらに、これまでの記録の中には、採集された詳しい地域まで書かれていないものがあり、このことが白山での種類数をはっきりさせられない原因の一つになっています。そこで、採集された場所が明らかなこれまでの記録と、私の採集データをあわせ、1,600m以上（白山ではこの標高から上が亜高山帯とされることが多いようです）で記録されたゴミムシ類を数えてみました。これらによると、白山で見つかったゴミムシ類は地表性、樹上性のものを合わせて、48種類になりました。これらのゴミムシ類の中には、ハクサンフウロやハクサンコザクラなどの高山植物と同様に、種または亜種の和名に「ハクサン」とついているものがあります。それは、ハクサンクロナガオサムシ（キタクロナガオサムシの亜種、写真）、ハクサンホソヒメクロオサムシ（アルマンオサムシの亜種で、ニシアルマンオサムシともいいます）、ハクサンヌレチゴミムシ、ハクサンナガゴミムシの4種です。ゴミムシ類にまで「ハクサン」と名の付いた種がいるなんてちょっとした驚きではないでしょうか。

これらゴミムシ類のうち、私が白山で最も数多く採集したのはオサムシの仲間です。オサムシ類はゴミムシ類の中でも、最もよく名が知られ、大型種を多く含むグループです。樹上性のカタピロオサムシ類3種を含め、石川県では13種が確認されており、白峰村市ノ瀬より高いところでは、地表性の種としてマヤサンオサムシ、クロナガオサムシ、ハクサンクロナガオサムシ、ハクサンホソヒメクロオサムシ、ヒメマイマイカブリ（マイマイカブリの亜種）の5種が確認されています。

白山での分布高度

ゴミムシ類は種ごとに分布している高度が異なっています。このことについて、オサムシ類を例に見てみましょう（図1参照）。クロナガオサムシ、ヒメマイマイカブリは、海浜近くからみられる種ですが、両種とも2,000m以上の地域にまで生息しており、かなり広い範囲の高度に分布しているようです。マヤサンオサムシも低地から分布していますが、白山では標高約1,500m以下の地域でしか確認されていません。これに対して、ハクサンホソヒメクロオサムシは、標高1,000～2,000mの範囲だけで見つかっています。また、ハクサンクロナガオサムシは、1,700mあたりから山頂部にかけて見られ、白山で最も高いところに生息しているゴミムシの一つです。これらオサムシ類も含めて、ゴミムシ類はそれぞれの種が一定の高度範囲に分布しています。白山に生息する主なゴミムシ類の分布パターンを表1に示しました。

種ごとに分布範囲が異なるだけでなく、同じ種であっても、標高が変わると体の大きさや形態が変化することがあります。図2は白山で採集したクロナガオサムシとハクサンクロナガオサムシの体長変化を示したものです。両種とも、標高が高くなるにつれて体長が小さくなっています。一般に、昆虫を含む変温動物は、標高の増加に伴って小型化するといわれており（逆ベルグマンの法則といいます）これら2種もその法則に適合しています。これは、高い地域の個体ほど成長や活動に使える期間が少ないために、短い期間で速く成長せねばならず、その結果小型化したのだと考えら

和名 \ 標高(m)	800	1000	1200	1400	1600	1800	2000	2200	2400	2600	2700
マヤサンオサムシ	[分布範囲: 800m - 1500m]										
ハクサンホソヒメクロオサムシ	[分布範囲: 1000m - 2000m]										
クロナガオサムシ	[分布範囲: 800m - 2200m]										
ヒメマイマイカブリ	[分布範囲: 800m - 2400m]										
ハクサンクロナガオサムシ	[分布範囲: 1700m - 2700m]										

図1 白山におけるオサムシ類の分布高度

表1 白山におけるゴミムシ類の分布範囲

2,100mより下に分布する種類 (山地帯～亜高山帯下部)	ムナビロナガゴミムシ, クロツヤヒラタゴミムシ, コクロツヤヒラタゴミムシ, マルガタツヤヒラタゴミムシなど
1,600m～2,400mに分布する種類 (亜高山帯下部～上部)	ウエノオオナガゴミムシ, ハクサンナガゴミムシ, ツヤモリヒラタゴミムシなど
2,100m以上に分布する種類 (亜高山帯上部～高山帯)	チビマルクビゴミムシ, オンタケナガチビゴミムシ, シロウマミズギワゴミムシ, など

れています。また、両種の体長差は、どの標高でもほぼ同じです。両種は簡単には見分けがつかないくらい似ているのですが、もしかしたら、この体長差があるために両種間の交雑が起きなかったり、両種の餌の大きさに違いがあったりすることが、共存を可能にしているのかもしれませんが。

白山での出現時期

分布高度のみならず、出現時期も種ごとに異なっています。1999年に調査した結果から、このことについて見てみましょう。

ハクサンホソヒメクロオサムシは、白山のオサムシ類の中でも、最も早く活動を始めます(図3)。5月20日の1,800m付近はまだ雪がほぼ一面に残っている状態でしたが、このような時期にも同種が採集されています。その後、6～7月を中心に出現し、8～9月にかけて姿が見られなくなった後、10月に再び採集されました。ハクサンホソヒメクロオサムシは雪が残る春から繁殖し、新成虫が秋に羽化するため、このような出現パターンをしているのでしょう。

これに対して、ハクサンクロナガオサムシは5～6月はわずしか採集されませんでした。7～9月にかけて多く出現していました(図4)。また、この種はかなり遅い時期まで活動しているようで、10月29日には、新雪がうっすらと積もった2,300m地点でこの種が採集されました。ハクサンクロナガオサムシは、夏から初秋にかけて繁殖のために活発に活動し、ハクサンホソヒメクロオサムシと異なった出現パターンをしています。

クロナガオサムシも、白山では夏季に多く見られ、ハクサンクロナガオサムシと同じような季節変動をしています(図5)。ところが、平地のクロナガオサムシは秋に多く、夏にはほとんど見られ

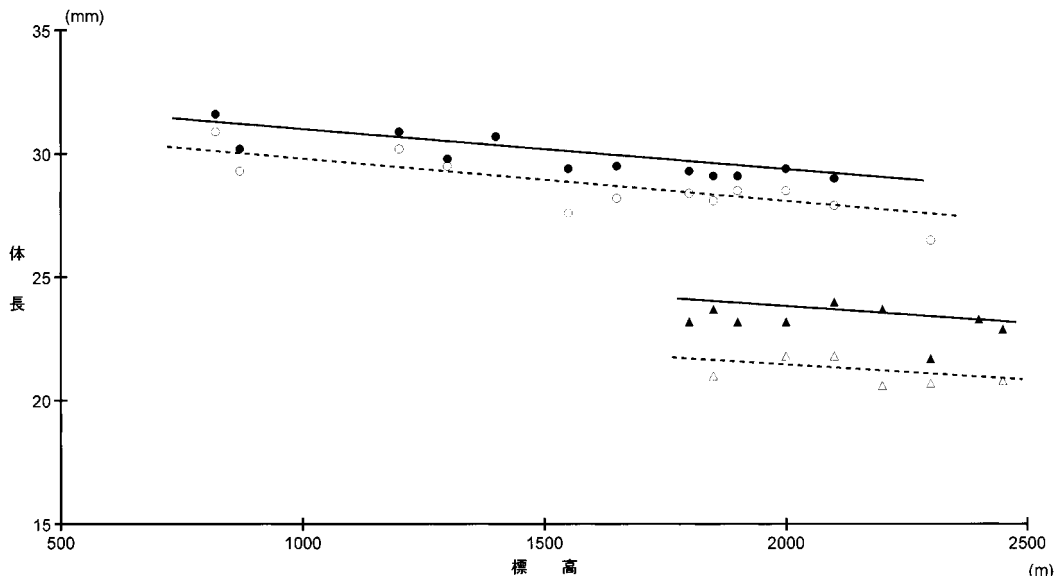


図2 クロナガオサムシ(●, ○)・ハクサンクロナガオサムシ(▲, △)の体長変化

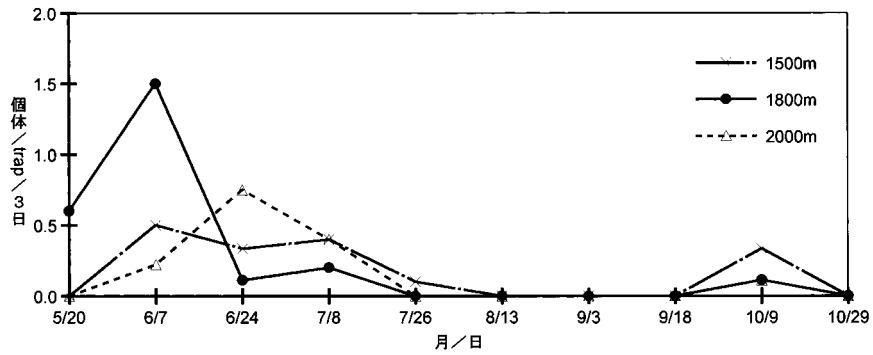


図3 ハクサンホソヒメクロオサムシ捕獲数の季節変化

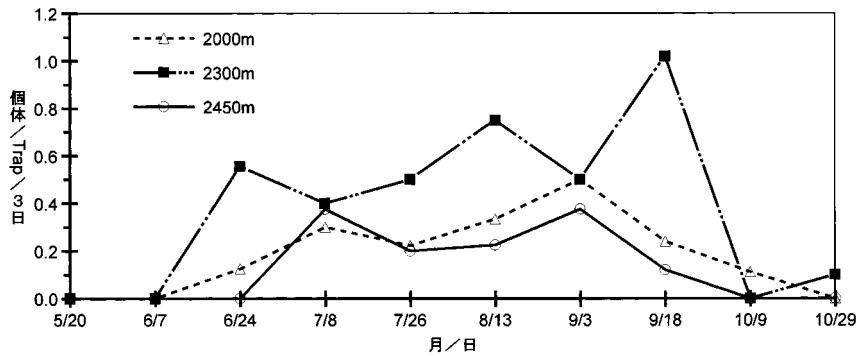


図4 ハクサンクロナガオサムシ捕獲数の季節変化

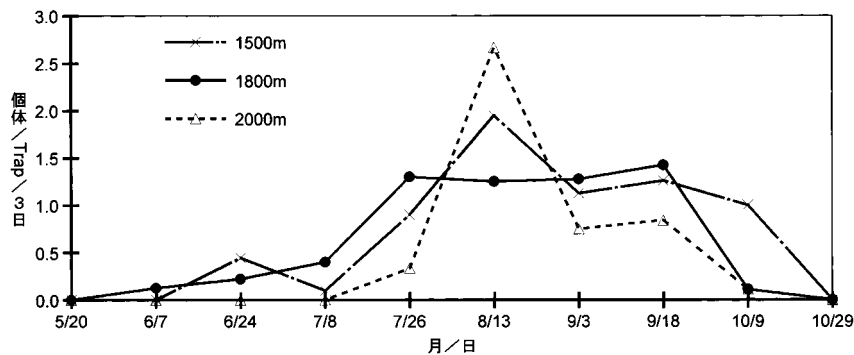


図5 クロナガオサムシ捕獲数の季節変化

ません。低地のクロナガオサムシは気温の高い夏季に休眠し、秋から繁殖のための活動を再開します。これに対して、高標高地のクロナガオサムシは、夏季に気温があまり高くないために、はっきりとした休眠期間を持たないようで、その結果夏から秋を通して出現すると考えられます。このように、種ごとに出現時期が異なるだけでなく、同じ種であっても標高が違えば活動時期も変わってくる可能性があります。

ここで述べたように、ひと口にゴミムシ類といっても、種ごとに異なった分布域や生活史をもっています。しかし、異なっているのはそれだけではありません。現在私は、2,100m以上の地域を中心に、特徴的な環境や植物群落に生息するゴミムシを調べています。その結果、同じ標高であっても、環境ごとに生息しているゴミムシ類は異なることがわかってきました。さらに、2つの環境の境界ではゴミムシ類がどのような分布をしているのか、夜にかなり冷え込む高地でゴミムシ類はいつ活動するのか、同じ環境でも雪解けの時期によって出現するゴミムシ類は異なるのかなど、ゴミムシをめぐる疑問はつきません。私の調査もまだまだ続きそうです。

<白峰小学校>

美濃馬場と美濃禅定道

小川 弘司

白山（右上）と石徹白（左下） 写真提供：上村俊邦

いにしえより、信仰の対象として崇められていた白山には、麓から御山（白山）へ登る道が整えられていきました。この道のことを「禅定道」と呼び、白山を取り囲む三方向から「越前禅定道」、「加賀禅定道」、「美濃禅定道」が成立しました。また、禅定道の起点として信仰上の拠点となった場所を「馬場」と呼び、「越前馬場」、「加賀馬場」、「美濃馬場」ができました。この禅定道や馬場の成立は古文書や山頂部の考古学的な調査などから、今から千年以上前であることが指摘されています。今回、この白山の禅定道と馬場のうち、美濃（現在の岐阜県）側のものを紹介したいと思います。

美濃馬場 - 長滝白山神社

美濃禅定道は、現在の岐阜県白鳥町から始まります。この道は主に東海地方の人々が白山へ登るのに利用していました。起点の美濃馬場は現在の「長滝白山神社」、「白山長滝寺」です。両者は、明治の神仏分離前は「白山中宮長滝寺」と称して一体化（神仏習合）したものでした。

「白山中宮長滝寺」の創建は白山を開山したとされる泰澄大師と伝えられ、美濃における白山信仰の拠点でした。全盛時（平安時代末）には堂舎30余宇・6谷6院・僧坊360坊を擁したと伝えられています。明治の大火で堂舎のほとんどを焼失することになりますが、後に復興され、現在も往事と変わらぬ配置で寺と神社が同居しています。



長滝白山神社(右)と白山長滝寺(左)

白山中居神社と石徹白

美濃馬場の場合にはもう一つ、信仰の拠点となった神社があります。長滝白山神社から峠道を越え、石徹白地区にある白山中居神社です。神社名の「中居」は白山山頂の本

社と長滝寺との「中居（中間）」に位置したことによるといわれています。境内には樹齢1,000年を越えるとされる杉の大木が林立し、威風をなしています。

石徹白地区は周囲を山地で囲まれた盆地状の地形をなすところであり、白山中居神社を中心に白山信仰と共に生きた社家・社人（神社に仕えた人々）の村でした。全域が神社の神領で年貢は免除され、苗字帯刀も許されていました。人々は、夏は登山者の宿泊の世話や道案内をし、冬は御師となつて各地の信者（檀那と呼ばれていました）をまわつて布教活動をしていました。

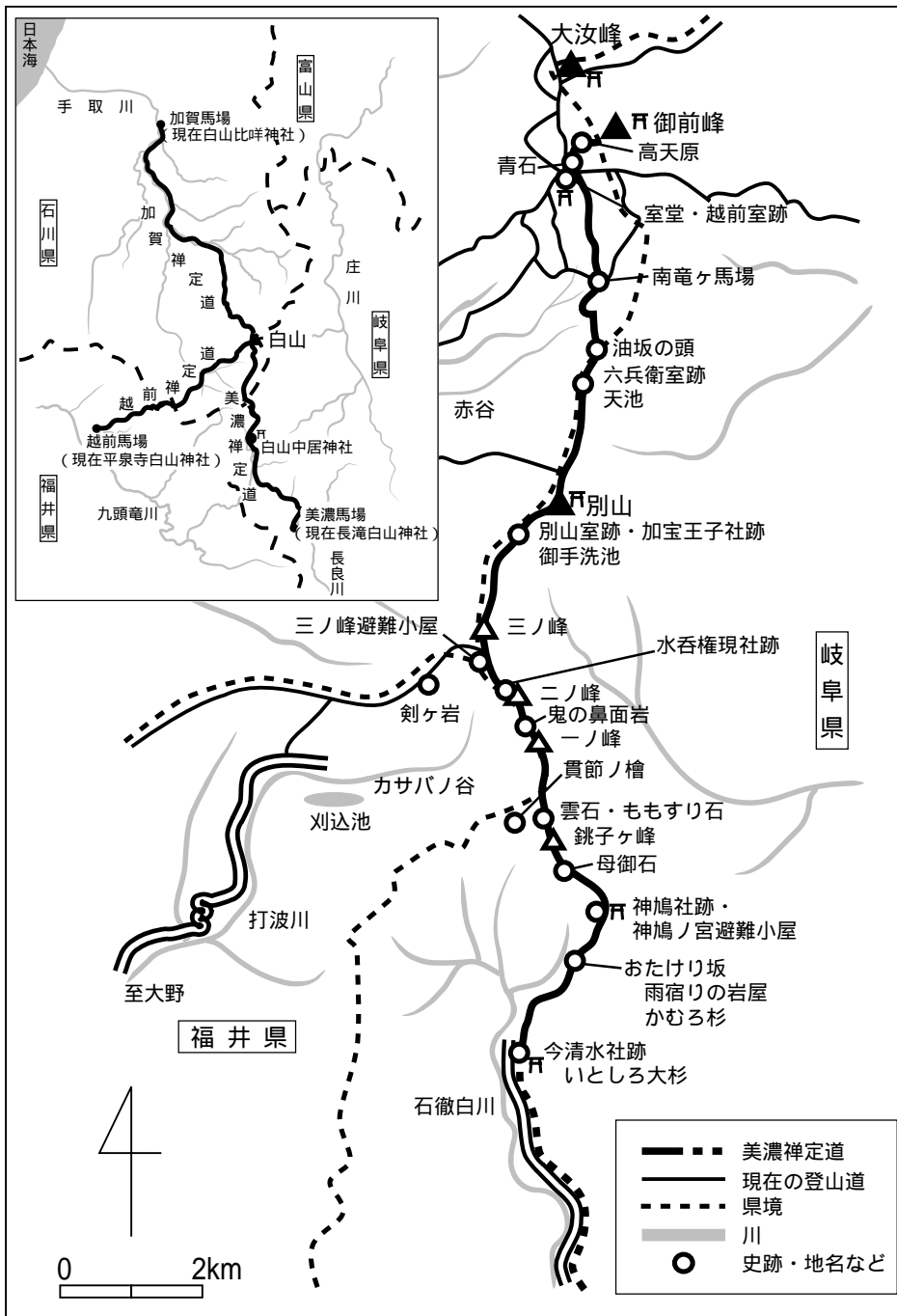
美濃禅定道に行く

いとしろ大杉から三ノ峰避難小屋へ

それでは、美濃禅定道の道をたどり、今も残る史跡を紹介していきたいと思ひます。現存する登山道は白山中居神社からさらに奥の「いとしろ大杉」からはじまり、石徹白道（南縦走路）として利用されています。「いとしろ大杉」は、

泰澄大師の挿した杖が生長したものとされ推定樹齢1,800年、周囲約13mもある老木です。昭和32年に国の特別天然記念物に指定されています。大杉のそばには「今清水社跡」があり、小さな祠があります。もとは修行所で社殿、拝殿などがありました。

ここから森林帯に入り、尾根伝いの道を登ります。途中、「おたけり坂」と呼ばれる急登があります。ここは女人禁制を犯してまで、白山に登ろうとした泰澄大師の母が神の怒りにふれ、大変な試練を受けた場所とされています。「おたけり坂」の間には、大師の金剛杖が生えたとされる「かむろ杉」と大師の母が血の雨・



白山中居神社

槍の雨を雨宿りした「雨宿りの岩屋」もあります。傾斜が緩やかになってくると、神鳩ノ宮避難小屋につきます。

ここは「神鳩社跡」で、美濃禅定道と別にあった修験者の修行道とがここで合流する場所でした。社跡には小さな石祠があり、その手前の広場（避難小屋のあるところ）に室（宿泊場所）があったようです。

この神鳩ノ宮避難小屋までは森林帯を行きますが、しばらく行くと稜線部に出てササ原が続き、視界が広がって景色が一変します。ここからは上品の世界であり、白山の神・仏の世界へと入って行く事になります。その稜線部の一角に「母御石」があります。なおも白山に登ろうとし続けた泰澄大師の母を、大師が石を割って閉じ込めたとされており、石には大きな割れ目があります。神域へは大師の母であっても入れないわけです。銚子ヶ峰（1,810m、ここも修行所であったとされています）を過ぎしばらく行くと「雲石」と「ももすり石」があります。「雲石」はササ原の中に雲のように浮かんでいることからこの名前がつき大小二つの石からなります。「ももすり石」は両側から二つの石が登山道をはさむようにあり、通るときには体のどこかが触れてしまうのでこの名が付いています。西側の眼下に「貫節の檜」を見ながら一ノ峰（1,839m）を過ぎ、二ノ峰（1,962m）頂上近くで「鬼ノ鼻面岩（天狗岩）」を見ることができます。稜線部にそそり立つこの岩は、現在の打波川流域の刈込池（福井県大野市上小池）に睨みをきかすようにそびえています。以前は鼻のような突出部がついていましたが崩れてしまいました。刈込池には泰澄大師が狩り込んだ悪蛇が封じ込められており、その姿を残したのが「貫節の檜」です。そして大蛇が出てこないか見張っている

のが「鬼ノ鼻面岩」です。鳩ヶ湯新道沿いの「剣ヶ岩」も刈込池の悪蛇を封じ込めています。

二ノ峰を過ぎ、しばらくいくと「水呑権現社跡」にでます。ちょっとした広場になった場所で神鳩社と別山社の中間の修行所でした。礎石の跡や石祠のあった跡があります。ここにあった仏像・仏具は麓の石徹白にある大師堂に安置されています。

三ノ峰避難小屋から室堂へ

三ノ峰避難小屋、三ノ峰の頂上をへて平坦な面が広がる別山平にでます。ここには「加宝王子社跡、別山室跡、御手洗池」があります。加宝王子社は別山を拝むような形でコの字型に石積みが残り、別山の拝殿であったとされています。別山室跡には土塁と石積みの遺構が残されており、室には管理する人がいてお金をとって宿泊に利用されていたようです。

別山（2,399m）は、別山平から急坂を登ると着きます。御前峰、大汝峰とあわせ信仰上の白山三山の一角をなし、別山大行事、本地仏聖観音を祀っていました。美濃禅定道を登るとき、眼前に気高くそびえ立つのはこの別山であり、別山までを石徹白の人々が支配していた時もありました。現在、この地にあった聖観音菩薩坐像は白峰村白山本地堂に安置されています。今は別山神社の祠があります。別山からは御舎利山、大屏風・小屏風を経て「六兵衛室跡」にでます。ここも室があった場所で天池のそばにあることから天池室とも



母御石（写真提供：上村俊邦）

言われます。六兵衛という人が参詣の人に酒食の商いをしていたとの記録があり、しっかりとした石垣が残っています。また祠のあった石積み遺構も見られます。

油坂の頭を通り、赤谷を渡ると「南竜ヶ馬場」に出ます。竜ヶ馬場は「仙人の龍馬の調馬の場所」とされ、大汝峰の北方には北竜ヶ馬場があります。竜川（現柳谷川）を渡って、御前坂（現トンビ岩コース）を登ります。万才谷雪渓を横切ると「室堂」に出ます。「美濃室」はこの万才谷雪渓あたりに位置したとされます

が場所は不明です。かつての「越前室」である「室堂」には、室堂センターや白山比咩神社奥宮祈禱殿があり、白山山頂の中心施設になっています。ここから御前峰には新しく整備された石畳の道を登り、途中日蓮上人坐像が描かれた「青石」、石仏のある「高天原」を過ぎ山頂にたどりつきます。山頂には白山奥宮が鎮座しており、今は白山比咩大神をまつります。



石徹白 - 白山道清掃奉仕活動（写真提供：上村和夫）

今も登山道を守る

最後になりますが、石徹白地区で行われているユニークな取り組みを紹介したいと思います。白山とともに生きてきた石徹白の人々は、禅定道の維持管理もこの地区の人々が長年行っていました。これを「白山道刈り」と称し、村の人々が交代で出役して毎年三ノ峰避難小屋あたりまでの草刈りを行っていました。しかし、近年は過疎化で若者が減少しそれが維持できなくなってきました。そこで外部から広くボランティアを集って道刈りをするようになりました。「石徹白 - 白山道清掃奉仕活動」といい、いとしろ大杉周辺や銚子ヶ峰までの登山道の清掃活動を行っています。10回目の今年は地区外からの参加者130名と地元の方100名とを合わせ、230名で清掃活動を行いました。参加者からは賛辞の声が寄せられるなど、禅定道の歴史を知らしめる体験活動として、素晴らしい試みだと思えます。

石徹白から白山への道はその距離が長く、アップダウンもあり体力的にきつい道のりです。現在、白山への最短の登山道は石川県側の砂防新道から登る道で、登山者の多くはここから白山に登ります。「登り千人、下り千人」と呼ばれた美濃禅定道も、今はここから白山（御前峰）を目指す人は、そう多くはありません。登山用具や食料品等に恵まれた時代とは違い、昔の登山は想像以上に過酷で厳しいものがあったと思います。この道を実際に歩き昔の修行者達の偉大さを実感してみるのもよいのではないのでしょうか。

< 白山自然保護センター >

サルとクマとの共存のために 2

- 石川県野生動物保護管理計画 -

野崎 英吉

今回は、計画の概要を紹介しましたが、今回は計画の実施状況と白山自然保護センターが担当している調査について、解説します。

ツキノワグマ調査

平成7年度から3年間、石川県では（財）石川県猟友会の協力を得て、ツキノワグマが生息する県内3市4町5村についての個体数密度調査を実施しました。この結果、生息数は560頭と推定されました。この推定値に、誤差を加味し県内の生息頭数を500～600頭と推定することにしました。

保護管理計画によるクマの捕獲年度は、狩猟期初日の11月15日から1年間としました。少し変則的な算定方法ですが、これは、個体数のコントロールの方法を狩猟を主とし、個体数調整を従に考えているからです。つまり、自由な狩猟行為を主に考え、規制が可能な個体数調整を補足的なものとして考えています。例えば、年間の捕獲数の上限を60頭とします。狩猟期間中に40頭捕獲されると、 $60 - 40 = 20$ 頭で、特別捕獲許可により年間の捕獲可能なクマの数は20頭ということになります。個体数調整で、その20頭の枠内で捕獲が可能であるということです。

県では、調査を実施するため狩猟者や有害鳥獣駆除実施者から資料を提供してもらっています。歯は年齢推定のため、大腿骨は栄養状態を調べるため、子宮は繁殖状態を調べるためです。呼びかけに応じた狩猟者から農林総合事務所に提出された資料は、その後白山自然保護センターに送られて、分析されます。

昨年の収集された歯は27頭分、全体の75パーセントが集まりました。



麻酔のきいたクマをドラムカン檻から引き出す



奥山放獣、移動用ドラムカンから出てくる

奥山放獣試験

近年小松市を中心とした加賀山間部の植林地ではクマによる剥皮被害が増加するとともに、河北郡以南の加賀地域の里山、丘陵地帯では出没がみられるようになりました。これらの、被害や出没に対し、従来の被害・出没 駆除から、クマの保護管理の方法を見直すため、奥山放獣による方法を検討することになり、2年間にわたり試験を実施しています。

試験は、里山や植林地で被害を起こしているクマを生け捕り捕獲し、奥山へ移動して放すもので、放す際にはクマ撃退用唐辛子スプレーをクマに吹き付けます。里山や植林地で捕獲されたクマに嫌な悪い体験を学習させることにより、里山や植林地などに出てこなくさせようと言うのがねらいです。今までに、小松市の丸山地区周辺で4頭、金沢市湯涌で1頭を捕獲し、放獣しています。

平成12年8月15日に小松市丸山でメスの成獣が捕獲されました。このクマは子グマを2頭連れていました。1頭は親グマと一緒にドラム缶檻の中に入っていました。もう1頭は、母親と兄弟が檻で捕獲されたあとも、その檻の近くにずっといたようで、私たちが檻の近くで作業をしている間、「クワックワック」となきながら、木の陰や、近くの木に登って心配そうに様子を見に来ました。捕らえられた親のクマは体重46kgでした。このクマは、子連れで1頭の子が捕獲されなかったことから、麻酔、首輪発信器装着、計測をしたあと、放す間に辛子エキスの入った撃退スプレーが噴霧され、すぐさまその場で放されました。

平成13年8月1日に金沢市畠尾で捕獲された1頭は約6km奥に運んで放獣されました。また、同じく平成13年8月3日および23日に小松市内丸山周辺で捕獲された2頭は、捕獲地点からさらに奥に約10km運んだのち放されました。いずれも放す間に辛子エキスの入った撃退スプレーが噴霧されました。

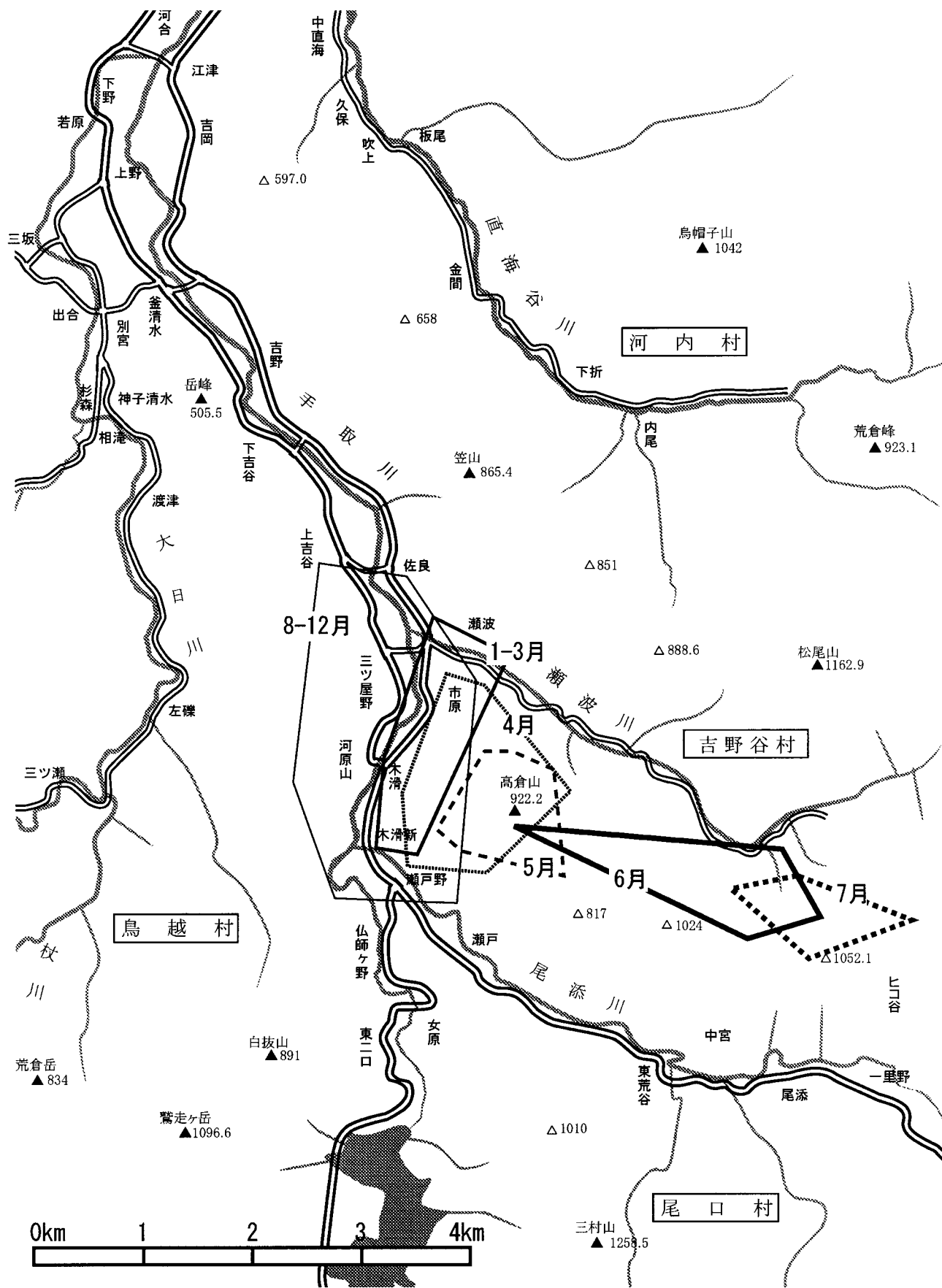
これら4頭の追跡の結果、平成12年に小松で捕獲された母グマは、大きく移動することなく、捕獲された地点の近くにいることがわかりました。また小松市内で平成13年に捕獲された2頭のうち、1頭は11日後、もう1頭は84日後に捕獲地点から2km以内の所に戻っていることが確認されました。金沢市内で捕獲されたものはその後の行方は不明です。

ニホンザル調査

ニホンザルの群れは、平成13年現在、21群約1,000頭が生息し、これらのうち、集落周辺で農作物に被害を与えているものは、5群であるといわれています。平成11年度から、白山麓鳥獣被害対



接近通報システム



ニホンザル調査地とタイコA 1群の行動域の季節的变化 (2000-2001年)



捕獲したサルに木綿糸で発信器を縫いつけているところ



8素子アンテナとレシーバーを用いてサルやクマの発信器からの電波の来る方向を探す。

策協議会が中心となって、被害防除のためニホンザルの接近通報システムを始めました。このシステムは、ニホンザルに発信器を取り付け、そこからの電波によりサルが集落周辺にいることを察知して、被害が発生する前に追い払いを実施しようと言うものです。各町村では、それぞれ1名の連絡通報員を配置し、サルからの電波を頼りに、連絡通報員は集落周辺の見回りを実施しています。

これに対し、白山自然保護センターでは、集落周辺以外の地域でもサルの群れの動きを1年を通して追跡しています。1年を通じてサルの群を追跡することにより、季節移動をしている群れであるか、集落周辺に定住し、畑の作物に依存している群れであるかを区別するためのデータを収集しています。また、チャンスに恵まれれば、電波を頼りに群れを観察することができるので、季節毎の食性や群れの構成、個体数も数えることができます。

現在までに、5群9頭のサルに発信器がつけられています。オスは4、5歳になると群れを離れる習性があるため、発信器をつける対象はおとなメスとしています。念のため、一つの群れに2頭（メス）ずつ発信器をつけるようにしました。発信器の電池の寿命は約3年間。1度つけると3年間追跡することができます。首輪は体に優しい布製で、取り付けは木綿糸で縫いつけ、時がたてばはずれるようにしています。

その結果、吉野谷村の木滑新から瀬波にかけてよく出てくるタイコA1群は、4月から徐々に集落をはなれ、瀬波川に沿って上流に移動していき、6月には中宮温泉スキー場の北側、7月に一里野温泉スキー場の向かい側の吉野谷村ヒコ谷上部の林に移動していることがわかりました。また、タイコA1群はこの群れのほかに、10頭程度の小さな群れに分かれて6月にすでに木滑周辺に出没していたことがわかっています。また、9月から10月には尾口村の女原、東二口、鳥越村の仏師ヶ野に出て被害を起こしているタイコA4群は、11月から3月にかけては手取川ダム周辺の林にいたものが、4月には集落から離れ尾添川沿いに移動しながら5月には東荒谷から目付谷周辺の林、6・7月は、尾口村と白峰村に接している三村山からさらに奥の林をよく利用していることがわかりました。そのほか、クロダニ、タイコA4分派群、オダニ群を追跡中です。クロダニ群は吉野谷村佐良から手取川沿いに北上し河内村福岡までと直海谷川沿いに吹上までの範囲を、タイコA4分派群は東二口と仏師ヶ野を、オダニ群は尾添から三又までの範囲を移動していたことが確認されています。集落周辺にはまだ、発信器が着いてない群れが2つ（鳥越村に2群）あることがわかっています。これらの群れにもできるだけ早く発信器を装着し、その動きを明らかにできるように白山麓鳥獣害対策協議会と共同して捕獲につとめています。

サルのモニタリング調査は、群れの移動を追跡するほか、群れの個体数がどのように変化しているかを調べる作業が残っています。これからの季節、木の葉が落ち、雪が積もると、雪を背景にサルの姿がよく見えるようになります。群れ毎にサルの性別、年齢、個体数など、群れの全体像を把握できるよい季節になります。野外調査は少々寒いですが、がんばって調べたいと思っています。

<白山自然保護センター>

殊才 実

今年の中宮展示館は11月11日で閉館しました。4月28日からの半年あまりの閉館期間中に、昨年より多い42,423人の入館者がありました。昨年より雨の日が少なかったことや、紅葉のきれいな10月に多くの来館者があったことが増加の原因と思われます。昨年の秋は、スズメバチやカメムシ、テントウムシが大量発生しましたが、今年はいいたことはありませんでした。また10月中旬から11月上旬には、サルの子が展示館周辺に姿をよく見せました。この秋、ハイビジョンコーナーでは、今までの60インチから100インチにスクリーンが大きくなり、スピーカーも4つとなり、映像、音声ともに迫力のあるものとなりました。また作品も「白山をまもるために」、「白山、神秘と伝説」、「白山、水の旅」の3本を新しく作りました。

よく来館される方からの便りが寄せられましたので、ここに紹介します。

厳しい現代社会に生きる私たちにとって、自分たちの自由な時間を見つけることは、素晴らしくとても大切な事だと思います。私は自然の中で四季折々を見つけたとき、やさしい気持ちになっている自分に、ほっとする事があります。

中宮展示館の周辺では、雪解けとともに春の気配が訪れると、歩道の周りはピンクに染まります。カタクリ、キクザキイチリンソウ、イワカガミなどの花が群生しています。木々の芽生え、新葉や花などは朝日の光を透してとても美しく輝き、耳を澄ませば小鳥の音が…。カモシカの親子も顔を覗かせています。

「あれ？、この花たちは里の花よりも色が濃くて小さいよ」と思わず叫んだ。展示館の裏山でした。街中の花よりも山の春の妖精を、皆で探しに行きませんか？！

一雨降るたびに葉に緑の輝きが増してきた頃、青い空に流れる白い雲に誘われて、またまたやって来ました。「カナカナカナ」ヒグラシが鳴いています。額にたまった汗が一瞬引いたような気がして、山道ではもう赤トンボが飛んでいます。低木や草を覆うクズの葉の下では、サワガニたちがかくれんぼしていて、木のベンチで昼寝していたらクワガタが飛んできました。「あれ？、街の暑さとは違って、ここの空気は澄んでいて涼しいよ！」と言ったのを覚えています。心まで癒して、やさしい気持ちにさせてくれる場所でした。

木々の葉が色づく頃、逆光で眺めていた葉は花卉のように葉脈を見せて、造形的でとても素敵です。そしてこの辺りの山々が、岩肌を出して風景がいつそう移り変わってきた頃、イヌワシやクマタカがつがい姿を現します。

蛇谷周辺は、季節によってさまざまな面を見せてくれるところなのです。皆様も素敵な自然のオアシスを見つけに、立ち寄ってみてはいかがでしょうか。

小林 茂夫

小春

湯原敦子



展望台の休憩舎

「白山が見える場所は、ありませんか？」
カウンターでよく尋ねられる質問です。

こんな時、岩屋俣園地をご案内しています。
岩屋俣園地は、ちょっとした山登り気分を味わえる、1周約2時間ほどの自然観察路です。
白山展望台からは、真正面に白山を眺めることができ、四季折々の表情を見ることができます。



影に注目して歩くと...

普段、森の中へ入ることのない方や、自然と接する機会の少ない人も、「白山を見たい！」という欲求をきっかけに森の中へ入り、自然に対して一つでも小さな発見・疑問・感動を得られれば、と思っています。

そのためにも、そのお手伝いができるよう、また、その疑問などがきっかけで、更に関心が広がるように、道のご案内だけではなく、自然の中での楽しみ方や視点を変えた自然の見方などを皆さんにお伝えしていきたいと考えています。



おもしろい形、みつけた！

岩屋俣園地には、森とわたしと白山と仲良しになれる「こみち」があります。

来春、暖かくなりましたら、みなさんも、ちょっと歩いてみませんか？



ゆったり木もれ日を感じて

センターの動き（7月10日～11月15日）

- | | |
|---|--|
| 7.12 白山国立公園管理計画検討会
（白山国立公園センター） | 9.13 姫路獨協大学トレッキング案内
（中宮展示館周辺） |
| 7.13 中部6県鳥獣行政担当者会議（中宮展示館） | 9.21 北陸地質情報展（金沢市） |
| 7.20 三方岩岳トレッキング案内（三方岩岳） | 23 } |
| 7.20 白山登山ピーク時交通規制開始（市ノ瀬） | 23 } |
| 7.22 白山まるごと体験教室「白山を撮ろう」（白峰村） | 9.27 ワイズメンズクラブ講演（金沢市） |
| 8. 5 白山まるごと体験教室「川虫と川遊び」
（中宮展示館） | 9.29 白山まるごと体験教室「秋の音・ネイチャーコ
ンサート」（中宮展示館） |
| 8. 9 サル被害対策研究会（尾口村役場） | 10. 4 子ども自然学校検討委員会
（白山ろく少年自然の家） |
| 8.20 猛禽類調査検討委員会（東京） | 10. 8 白山登山ピーク時交通規制終了（市ノ瀬） |
| 8.23 県庁インターンシップ（本庁舎・中宮展示館等） | 10.21 白山まるごと体験教室「紅葉のブナ原生林」
（市ノ瀬周辺） |
| 8.26 県民白山講座白山フォーラム「恐竜のいた時代」
（白山国立公園センター） | 10.22 白山白峰自然体験村実行委員会（白峰村） |
| 8.27 白山猛禽獣害対策協議会会議（尾口村役場） | 10.22 住民相談にかかる関係機関連絡会（鶴来町） |
| 9. 4 子ども自然学校検討委員会
（白山ろく少年自然の家） | 11. 5 市ノ瀬ビジターセンター閉館 |
| 9. 7 手取川濁度対策協議会（白峰村） | 11.11 中宮展示館閉館 |

編集後記

10月下旬に白山の岐阜県側の登山道の一つを歩いてきました。風のないあたたかい日で、ブナ林の中をひとり静かに歩いていると、林の中からカサコソと落ち葉を踏みつけるような音がしてきました。2～3か所から聞こえてきたので、目を凝らしていると、音の主はどれもホシガラスであることがわかりました。登山道には落ち葉の中にミズナラやブナの実が見つかりました。ホシガラスには、食べ物を貯える行動が知られています。きっと冬に備えて、霧中になって木の実を探していたのでしょう。この秋、白山の石川県側ではブナの実ほとんど見つかりませんが、ここには中身の入った実が登山道にも落ちていました。

今年の白山の初雪は遅く、ようやく11月4日に平野部からの雪化粧が確認され、金沢地方气象台による初冠雪の発表がありました。平年の10月16日より19日遅い記録でした。施設だよりももありましたが、中宮展示館のハイビジョンシステムが新しくなりました。画面、音質ともにハイビジョンにふさわしいものとなり、また作品も3本追加となりました。展示の一部も最新の情報をもとに作り替えましたので、またご覧いただきたく思います。

（上馬）

目次

表紙 奥長倉避難小屋	上馬 康生 ...1
白山のゴミムシ類	平松 新一 ...2
美濃馬場と美濃禅定道	小川 弘司 ...6
サルとクマとの共存のために2 石川県野生動物保護管理計画	野崎 英吉...10
施設だより（中宮展示館）.....	殊才 実...14
（市ノ瀬ビジターセンター）.....	湯原 敦子...15

はくさん 第29巻 第2号（通巻120号）

発行日 2001年11月15日（年4回発行）
 編集発行 石川県白山自然保護センター
 920-2326 石川県石川郡吉野谷村木滑ヌ4
 TEL07619-5-5321 FAX07619-5-5323
 URL <http://www.pref.ishikawa.jp/recr/hakusan/haku.html>
 E-mail hakusan@pref.ishikawa.jp
 印刷所 株式会社 橋本確文堂